

第90回月例研究会報告

No.0009 蓮見 節夫

テーマ：「ISMS 構築事例」

経営ツールとしての ISMS 構築」

講師：(株)ディー・エヌ・ピー・ファシリティサービス 代表取締役社長 大月 弘行氏
(株)アドバンスド・アイソ・マネジメント
コンサルティング部長 榛澤 健一氏

日時：2000年9月6日(金)18:30~20:30

場所：東京労働スクエア

(ワーカーズサポートセンター)704号室

はじめに

表記の月例会において、大月氏は経営のツールとしての ISMS 構築の事例を発表した。マネジメントにおいて、ビジネスチャンスは、同時にビジネスリスクを伴うものであり、ここに単なる認証のためでない ISMS 構築の理由があるという。

講演要旨は以下のとおり。

- 目次
1. 序
 2. マネジメントについて
 3. 推進体制
 4. 構築の実際
 - (1) 枠組みの確立
 - (2) マネジメントについて
 - (4) リスクアセスメント
 - (5) 狭義のマネジメント
 - (6) 管理策
 - (7) リスクコミュニケーション
 5. まとめ

1. 序

(株)DNP ファシリティサービスは、1999年4月に、大日本印刷株式会社のグループ企業5社

が合併して設立した。

(株)DNP ファシリティサービス(以下、DFS社と称する)は塀に囲まれた中にあるが、従業員、業者、お客様が出入りする。社としては、社内に入ったこれらの人たちの安心と安全を守る義務がある。さらに本社のみならず全国に散らばった100箇所に分散して仕事をしている多くの従業員、お客様の安全を守らなくてはならない。人だけでなく建物、機械、什器備品なども適切に機能するように保全されなくてはならない。

情報とは何か

広義には、「情報」とは存在またはモノ(エネルギー含む)の時間的・空間的及び質的・量的な「パタン」である。狭義には、「情報」とは意味を持った記号」である。

すべてのものごとや事象には「情報」と物質の2つの側面がある。

情報・メディアは言葉情報、文字情報、記号情報へと発展してきた。

情報の流れのフレームワークには、外部環境から企業内へ、企業内処理情報、企業から外部への三つの流れがある。

2. マネジメントについて

経営者が求めることは、“生き残る”“企業を守る”ことであり、そのために、儲かるか、問題は何か、投資が必要かを考える。

“生き残る”“企業を守る”ためには、企業組織、内容、外部環境などが「見える」ことが必要。見えなければ、意思決定できない。

DFS社の2002年度のキーワードは、サバイバル21で、“お客様は誰か”、“守ること”、収益・売上、リスク回避・予防改善、存在価値・自己革新を挙げている。

リスクや売上/利益が見えないと判断、決断などの意思決定ができない。

トップマネジメントの役割は、指示し制御す

ることである。

マネジメントは Plan、Do、See の経営学の手法を使う。実現のための構築手法は、Plan、Do、Check、Action の経営工学の手法を使う。

ISMS は、経営学の手法の Do に当たる。

情報セキュリティシステムは深層、中間層、表層の3層構造を成す。表層は開示部分でもある。経営は安全基盤の上に品質、環境、リスク、衛生などがあり、その上に情報がある。つまり、“守る”が下にあり、“見える”が上にある。

各マネジメントスタンダードの対象は、経営側面である。その目的は統合である。マネジメントスタンダードは、本質的には自己宣言(自己認証)を旨とする。

3. 推進体制

実施機能として、経営層、ミドル管理層、現場がある。スタッフ機能として、推進事務局とメンターがある。メンターは事務局と現場の橋渡しの機能を持つ。

推進事務局の役割は、推進計画策定、システム全体のフレームワーク作り、システム実行の基準作りと展開、システム完成目標への舵取り、トップと現場と第三者機関とのコミュニケーション調整がある。

3. 構築の実際

ここで構築の実際について詳しい説明があったが、ここでは省略する。

最後に質疑応答があり、認証取得までの流れについて説明がありました。「情報」の認識を改めた、生命を守ること、財産を守ることが大事であり、命を脅かされる確率が小さいからといって問題ないとはいえない、という発言が印象に残りました。(参考文献:「HACCP-9000 導入ガイドブック」嶋田茂〔監修〕/大月弘行〔編著〕日刊工業新聞社 定価 3300 円)